

昭和五年に辻永齊先生に師事して、奈良に行きました。奈良の古い伝統を模倣したり、手伝ったりしたわけです。辻先生は二十七、八歳の若い方で、やっと独立したばかりなんですね。それで先生と私、お互いが研究生みたいなもんですよ。先生自身がやっことして仕事をされる状態ですから、お金ももらえません。全然遊ぶこともできないしね。

だから仕事をしないと食えなくなりまして、一生懸命仕事をやりましたよ。よく働いたから、それで仕事を覚えたのではないですかね。とにかく無我夢中で仕事をやりましたよ。

しかし、こういう仕事は、今までやったことは全然だめなんです。私たちがご飯をいただくためには、同じ仕事というのはきませんでしょう。一つ一つが変わったものばかりですからね。一作一作が勉強なんです。だからご飯が食えるようになるまでの苦勞というものは大変なんです。

こういう仕事を習うには、不景気な貧乏な時代でないとだめなんです。

貧乏

それから昭和八年に上京し、赤池友哉先生に師事し、漆芸家として独立しました。

できない。
勝手に弟子たちが勉強して、好きなことをやって、時々私がこれを手伝ってこれというぐらいいいけど。向こうから何しましょかといわれると、ひとつひとつ考えてやらなくてはならないしね。

私たちは一つのものを作るとなると何ヶ月とかかりますから、これをやれといわれたらそれを朝から晩までやっていますよ。私たちはそういう修業をやってきましたんです。

下に布を張ったり、下塗りだけを毎日やって、古紙を少なく使っていい作品を作るといことが毎日の勉強なんです。いかにハケを使うかと、ヘラをうまく使うかということとはなかなかできないんです。ところが石川県の輪島あたりへ行きますと、私たちが何十年と勉強したところが、簡単にできているんですね。下塗りの人、ハケの人、ヘラの人全部決まっているんです。だからそういう仕事はうまいけれど、自分で創作することはできません。

仕事が上手、下手ということではなくて、その過程のこと全部を私たちは極めていますからね。

創作

創作するのがやっかいなんです。作るのは腕に隠れていますから、この腕を

こういう職人の仕事というのは昔は本当に不景気だったんです。ところが東京という所は、特殊な人といえますか、金持ちの人が多いいですね。そういう人たちから外、他の部門の人たちは裕福な生活をしていました。

私は生活力がないのですから、熊本あたりから出て来て、誰一人として知ってる人はいないんです。だからひき上げてくれる人、買ってくれる人がいないのですから、徹底した貧乏をしていましたよ。家内にもずい分苦勞をかけた。

「使える物」の美

漆器の魅力といえますか、伝統の美しさというものは、例えば盛器にお菓子なんかかいて出したらとしますね。その時にお菓子が生きてきて、みなさんに喜んで食べていただき、食べたその盛器を手にとってみたくならないかな、そういうものが名品ではないでしょうか。食べ終わったら後、触ってみたくならないかな。漆器の美しさといえます。

だから時代にそっていかないと、中には時代離れたものもありますが、例えば大正時代の作品なんて今は使えませんでしょう。作品をみればいつの時代のものかわかります。

漆というのは、使い込めば使い込むほど

動かせばいいわけですが、創作するのは難しいですね。難関はこれだけですよ。模倣するのは、若い頃にうんとやっておられますからね。

これからは建築様式も変わってきますし、床の間なんかも少なくなっていく使用場所も変わってきますね。だから何回もひな型を作ったり、こわしたりして大変なんです。

そういう点が段々苦勞の種ですね。第一、漆がなくなりまして、九割を中国から輸入していますものね。

技術が伝統

今は注文がないわけですね。みんな展覧会などに出品した作品を買い上げてもらうわけですね。それとも一つは買い上げる対象が、使うものでなくて、偉い人の名前があれば芸術品として高いものになるわけですね。

だから本当に自分がお茶に使うからと特に注文して作らせるということはありせん。

展覧会だって、伝統工芸というけれども、入選するための作品は多いけれども、本当に輪島を生かした作品というのはあまりありません。やはり使えるものというのが基本なんです。作家にするという試みをやってみて。そうすると使えるようなものは作りは作れないということでしょうね。

ど味が出ます。使ってもらっているかどうかは一目見るとわかります。やっぱり作ったものからすると使ってもらいたいですね。

技術を捨てる

技術を捨てるということは、技術を人前でやってみせるということは今までなかったことですよ。技術というのはみんな秘伝ですから教えないんです。弟子が盗み取るわけです。今はこうやって見せながら教えます。そういうことが技術を捨てるということなんです。口で何回も教えてもだめなんです。実際にやってみないとね。口で言っても本を読めば別でもわかることでしょう。しかし腕は別です。腕の細工というものはどんなにやっても表現できません。

身につけた技術

終戦直後のあの時代、当時は本当に何もありませんからね。ひどいものでしたよ。その頃仕事をやめた人がたくさんいるわけです。やるにしても材料がありません。

だから何が伝統かわからない。技術が伝統だと思ってちよūdいのではないでしょう。技術を覚える伝統、その伝統を生かして近代的な作品を作る、そういう意味になるわけですね。

熊本あたりでも、昔みたいな素朴なキジ車を引っぱって歩く人はいないでしょう。昔は素朴だったですよ。やはり段々変わってきていますでしょう。

他力本願

私なんか本当に田舎者で、こんなことをいう資格はありませんけれど、今の若者は根気がなく、自分から進んでやろうとする者が少なくなっていますね。

みんな他力本願で、人がやらなくては、いわなくてはやろうとしません。特にこういう仕事をやる人とする人は、必ず自分から進んで仕事をしなくてはなりません。今の若い人たちはよく勉強していません。今の若い人たちはよく勉強していません。今から頭は確かにいいですね。でも他人からいわれてやるようでは本当に好きでこの道を選んだのかわからなくなっています。

輪島や四国は産地ですから、一つ技術を覚えればご飯を食えるわけです。町中が漆で固まっていますから、失業する心配もいらぬし、自分でやろうとすれば、問屋から仕事をどんどんもってきます。熊本あたりで私たちが独立してやろうとしたら大変ですけど、町中がそうだと

せんしね。転業したりして、どの職人の仕事もあの戦争でほとんどつぶれたのではないのでしょうか。

やはり十八、九歳の若い時に仕事を覚えておかないと、後では絶対覚えられないものね。

十代の時に教わったものは、一生忘れません。仕事をやっていると思い出します。身につけた技術というものは自然と出てきますし、体験したことは忘れません。例えば歩いて行った道は覚えてますけれど、人の車に乗せて行っても忘れた道はなかなか覚えられないでしょう。それと同じことなんです。だから自分が教わりに人に連れていってやらせて話を聞いても、全部忘れてしまいますよ。自分で、これをやるにはどうしたらいいか聞きに行って、自分で聞きただいたいのものは、忘れないですね。そして実際に自分でやってみたらね。

私は社会学がへたくそで金儲けができないんです。馬鹿みたいに漆以外には何もありませんからね。だから貧乏するのも激しかったのですね。

どんなに爆弾が落ちたって漆工芸にくっついていましたものね。

修業

今の時代に弟子をとるとなると大変なんです。都会では住宅の問題もありません。それに自分で思うように仕事も

から若い人だっよよくやっていますよ。漆がいやで都会に出て行ってもUターンしてくるそうです。

人間国宝

今は農家も、私たちの粟めし時代と違ってずい分変わってきていますね。農家の人が野菜買ったりして、全然農家らしくないんです。生活水準は確かに上がりました。明治、大正の人たちはずい分苦勞していましたよ。

私が熊本を離れた時は、ちょうど農繁期で誰一人として熊本駅に見送りに来なかったんです。今は熊本に帰って、空港から電話すると益城町ですから五分ずると車で迎えますものね。便利になりましたよ。

実は展覧会が毎年九月にあります。それで五月頃から作り出します。一番暑い時期は仕事ですよ。何十年と海水浴に行ったことはいないんです。子供たちも遊びたくてしかたないんですが、親父が汗だくでやってくるものだからがまんしてらんですね。家族にも本当に迷惑をかけたよ。

どうかこの仕事で食えるようになり、昭和三十一年には日本伝統工芸展に初入選し翌年同展最高賞を受賞しました。

昭和五十三年には重要無形文化財個人指定(人間国宝)を受け、とてもうれしいことですね。